

第 1 7 回  
全国果樹技術・経営コンクール  
受賞者の概要

主 催 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会  
〔 全 国 農 業 協 同 組 合 中 央 会  
全 国 農 業 協 同 組 合 連 合 会  
日 本 園 芸 農 業 協 同 組 合 連 合 会  
全 国 果 樹 研 究 連 合 会  
公 益 財 団 法 人 中 央 果 実 協 会 〕

後 援 農 林 水 産 省  
日 本 農 業 新 聞

## 第17回 全国果樹技術・経営コンクール 受賞者

### ○農林水産大臣賞

和歌山県	中垣 芳久	・	中垣 加代
長崎県	永田 茂文	・	永田 将子
宮崎県	藤元 学	・	藤元 美紀
山形県	さがえ西村山さくらんぼ部会		

### ○農林水産省生産局長賞

青森県	三浦 藤市		
岩手県	松本 正勝	・	松本 直子
福島県	宍戸 薫	・	宍戸 洋子
茨城県	本多 技研	・	本多 真弓
山梨県	笛吹農業協同組合八代支所ブドウ部会		
愛知県	愛知みなみ農業協同組合伊良湖ハウスミカン部会		

### ○全国農業協同組合中央会会長賞

北海道	山口 利幸	・	山口 加代子
福島県	宍戸 里司	・	宍戸 初子

### ○全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

福井県	深川 延衛	・	深川 節子
長野県	JA 佐久浅間果樹専門委員会プルーン専門部		

### ○日本園芸農業協同組合連合会会長賞

山梨県	北井 功司	・	北井 幸子
静岡県	朝倉 克年	・	朝倉 圭子

### ○全国果樹研究連合会会長賞

香川県	河野 統博	・	河野 良江
-----	-------	---	-------

### ○公益財団法人 中央果実協会理事長賞

大分県	藤原 輝幸	・	藤原 由美
-----	-------	---	-------

## はじめに

全国果樹技術・経営コンクール実行委員会  
委員長 弦間 洋

当コンクールは、平成11年度から、生産技術や経営方式等において他の模範となる先進的な農業者、生産団体等を表彰し、その成果を広く紹介することにより、我が国果樹農業の発展に資することを目的として発足したものであります。

近年の果樹農業を取り巻く環境には厳しいものがあり、高齢化が進展する一方で、次世代への園地の継承が円滑に進まず農地の荒廃が加速するなど、生産基盤の脆弱化がみられ、また、需要の伸び悩みや価格の変動などの問題にも直面しております。このような状況に対応するため、昨年4月に策定・公表された新たな果樹農業振興基本方針に即して、消費者ニーズに合った高品質果実の生産に始まる所得向上に向けた好循環を形成するための産地間や異業種などとの「連携」を強化する諸施策が進められております。同時に、昨年10月の環太平洋パートナーシップ（TPP）協定の大幅合意を受けた関連対策についても順次進められるところです。

このような施策が所期の成果をあげるためには、関係者の主体的な活動、とりわけ、産地の自助努力が必要かつ不可欠であり、産地振興の中核的役割を担っている方々の活動が最も重要であります。

このため、技術・経営のモデルとして受賞者の成果を広く普及するとともに、先進的な取り組みを実践している産地・生産者を励まし、施策の具体的な推進の中核的役割を担っていただくという視点から実施される当コンクールは、大変意義あるものと考えております。

第17回コンクールの受賞者の技術・経営の概要は以下に取りまとめられておりであります。いずれも、各地域において困難な諸条件を克服しつつ、独自の創意工夫や最新の知見の活用、計画的・効果的な投資、集団・地域の合意形成等主体的、積極的な実践によって、高い水準の技術・経営を身をもって達成し、他の模範となる方々であります。

受賞者の皆様には、長年にわたるご努力、ご研鑽に対し深く敬意を表し、心からのお祝いを申し上げるとともに、受賞を契機に、今後とも地域更には全国の果樹農業の中核的な先導者として一層ご活躍されるよう期待する次第であります。

終わりに、ご指導・ご協力を賜りました農林水産省をはじめ関係機関・団体の皆様、厳正な審査に当たられた審査委員の方々に対し、深甚の感謝を申し上げるとともに、引き続き本事業が多く果樹農業者の啓発や士気・意欲の高揚、更には我が国果樹農業の新たな発展に資する意義深いものとなるよう、今後ますますのご支援をお願い申し上げます。

## 農林水産大臣賞

- 和歌山県 <sup>きかわし</sup> 紀の川市 (キウイフルーツ、かき、かんきつ)  
<sup>なかがき</sup> 中垣 <sup>よしひさ</sup> 芳久 ・ <sup>なかがき</sup> 中垣 <sup>かよ</sup> 加代

かき175a、キウイフルーツ110a、うんしゅうみかん20a、中晩柑80a、試験園地15aの合計400aの大規模果樹専作経営である。

大規模経営でありながら、農地を自宅周辺に集積し、夫婦、長男の3人を主に父母を加えた家族5人の労働力でできる品種構成とし雇用費を抑えている。約40年前に率先して導入したキウイフルーツは、試行錯誤の末に地域に広く普及し、県内随一の産地に成長するとともに、収穫前の糖度13.5度以上を個性化商材の「熟れ姫」としてブランド化が図られている。

園内作業道を整備しSSや軽トラを自ら改良した園内専用運搬車を導入、ウッドチップーによる剪定枝処分の効率化と自家堆肥作りにより低コスト化に取り組んでいる。品質面では、かきは環状はく皮等により肥大・着色を促進、キウイフルーツは樹体毎に敷設したかん水パイプによるきめ細かなかん水管理と微量要素の葉面散布により高糖度品の生産拡大が図られている。また、かき、キウイフルーツとも県平均反収を大きく上回っている。

自園に試験園を設けて新たな樹種や新品種(バナナ、パイナップル、マンゴー以外の果実は全て試作)の適地性、栽培管理方法を研究し、試験等で得られた情報は地域・後継者グループなどと幅広く共有することで、産地と一体となった農業経営を推進している。自身の経営も後継者に計画的に移譲している。

## 農林水産大臣賞

- 長崎県 <sup>きせぼし</sup> 佐世保市 (うんしゅうみかん)  
<sup>ながた</sup> 永田 <sup>しげふみ</sup> 茂文 ・ <sup>ながたまさこ</sup> 永田将子

うんしゅうみかんを主とする435aの大規模果樹専作経営であり、夫婦、長男の家族3人に加え、常時雇用1人、臨時雇用により営まれている。

昭和58年就農時のうんしゅうみかん280aの経営から、自己所有田畑、山林の開墾により現在の規模に拡大している。所得の向上を図るため計画的な改植に取り組み、極早生系統から早生・させぼ温州主体の経営に転換している。また、無加温ハウスにも取り組み、3～4月期の収益確保が図られている。

高品質果実生産を目指し、全園でシートマルチ栽培を行っている。シートマルチは産地に先駆けて導入し、地域に普及している。園地の若返り(平均樹齢16年)や徹底した土づくり等により、SSに対応した広い植栽でありながらも平均単収は3トンを超える。

作業の省力化を進めており、園内道の整備によってほぼ全園でSSとシートマルチ巻上装置を導入している。また、肥料散布機やウッドチップー等の省力化機械も導入している。

平成21年から4年間、ながさき西海農協させぼ地区かんきつ部会の部会長を務め、事業を活用した共同選果場の選果機増設や産地への省力化機械導入等を推進した。また、獣害(イノシシ被害)の深刻化をうけ、地域の有害獣対策協議会設立を推進し、同協議会会長として研修会等での積極的な啓発活動により、被害額の大幅な減少に貢献している。

(平成23年に鳥獣害対策優良活動表彰にて生産局長賞を受賞。)

## 農林水産大臣賞

- 宮崎県 <sup>ひがししろかたぐんくにとみちょう</sup>東諸県郡国富町 (マンゴー)  
<sup>ふじもと</sup>藤元 <sup>まなぶ</sup>学 ・ <sup>ふじもと</sup>藤元 <sup>みき</sup>美紀

マンゴー67a、水稻120aの複合経営である。

平成11年の就農時には実家の菊とハウスみかんを管理していたが、県のブランド品目で高単価が期待できるマンゴーに転換した。ハウス67aの大面积を夫婦と後継者の3人の労働力で経営できるよう、全量を農協へ出荷することで選果の労力を軽減し、栽培管理に専念することで高品質果実の安定出荷が可能となっている。

ヒートポンプの導入、内張り多層化、丹念な見回りにより暖房費を節減するほか、ヒートポンプの冷房機能を使って秋期の夜温を下げて着花を促進し3～5月の単価の高い時期での安定した出荷を実現している。樹体をきめ細かく観察し、樹勢に応じた着果数量に制限することで果実肥大を促進することにより、高単収とともに3L以上が50%と高品質生産が図られている。天敵導入により薬剤散布回数を減らす工夫もされている。

地域のマンゴー部会長を務め、自らの技術・経験を部会員に伝えるとともに、他地域の生産者にも広く公開し、県内のマンゴー産地を支えている。

町内の中学生の農業体験学習の受入など青少年育成にも取り組んでいる。

## 農林水産大臣賞

- 山形県 <sup>さがえし</sup>寒河江市 (おうとう (さくらんぼ))  
<sup>にしむらやま</sup>さがえ西村山さくらんぼ部会 (代表者 <sup>あきば</sup>秋場 <sup>なおひろ</sup>尚弘)

おうとう608haを栽培する部会員2,113戸のJA部会である。平成27年産の共同出荷量は1,016トン、出荷額は約17億円である。

従来の栽培体系に加えて、加温栽培や県育成晩生品種の「紅秀峰」を導入し、出荷期間を従来の約2週間から8倍の110日間の長期出荷体制を構築している。生産面では、篤農家で構成する嘱託指導士会を設立し、技術指導による栽培管理の高位平準化を図るほか、高齢農家等の剪定作業を専門の部会員や若手部会員が受託することで高品質産地の維持を図っている。また、ハウスさくらんぼ研究会では県内で先駆けて新たな作型に取り組むとともに、加温栽培技術のマニュアルの開発を行ったことや、紅秀峰研究会では品種独自の管理技術を確立したことで産地の拡大に大きく貢献した。

販売面では、「紅秀峰」の厳選品を「初夏のルビー」と命名してブランド化を図っているほか、専門店や百貨店へ厳選パック、少量パック等の企画商品を積極的に提案して有利販売を推進している。新たな販路開拓のために、輸出に適する梱包資材や輸送経路の検討を行うほか、行政やJAと一体となった輸出先でのプロモーションにより、台湾やマレーシア等への輸出拡大に取り組んでいる。観光さくらんぼ園を皮切りに、もも、ぶどう、なし、りんごと地域の観光果樹園のリレー体制が構築され、地域周年観光を実現している。

### 農林水産省生産局長賞

- 青森県 <sup>ひらかわし</sup>平川市 (りんご)  
<sup>みうら</sup>三浦 <sup>とういち</sup>藤市

りんご 500a の大規模果樹専作経営であり、本人、両親の家族 3 人と常時雇用 4 人、臨時雇用により営まれている。

青森県内での矮性台導入は雪害懸念等から約 2 割にとどまるなかで、全園地を矮性台にして作業性の向上と高単収を実現している。園地内の植栽を品種毎に配列を区切り、生育の異なる品種をブロック管理することで作業動線の単純化と農薬ドリフトの影響を緩和し、さらに、農道の整備や出荷形態の改善もあって、作業時間は県の経営指標を 15% 下回る省力生産が可能となっている。

仕立て方法を「詰め剪定(短い剪定)」を改良した独自の方法にすることにより樹体の経済寿命を延長。また、市内の畜産農家との連携による堆肥投入等土づくりに取り組み、地域の「つる割れ対策」の普及を後押しするほか、自作の移動式かん水装置等を活用した渇水対策などにより、商品化率は 8 割以上を確保している。

SS を利活用した授粉装置の試験やジュース等加工品の 6 次産業化など、新たな取組を積極的に進めている。

地域のりんご組織のリーダーとして活躍するほか、「食育インストラクター」の資格を取得して地元の学生・生徒への食育の推進など地域活動にも積極的に取り組んでいる。

### 農林水産省生産局長賞

- 岩手県 <sup>もりおかし</sup>盛岡市 (ブルーベリー、りんご、6 次産業化)  
<sup>まつもと</sup>松本 <sup>まさかつ</sup>正勝 ・ <sup>まつもと</sup>松本 <sup>なおこ</sup>直子

りんご 150a とブルーベリー 30a を基幹とした大規模果樹専作経営であり、夫婦、父、長男の家族 4 人と臨時雇用で対応し、地産地消カフェには常時 1 人を雇用している。

昭和 60 年に就農後、りんご+水稲の複合経営から、りんご+ブルーベリーの果樹専作経営に転換した。ブルーベリーについては、岩手大学の指導のもとで地域の生産者とともに生食向け大玉生産技術を築き上げ、さらに夫婦が地域を牽引してきたこともあって、松本氏が居住する盛岡市は、現在、県内トップレベルのブルーベリー産地に成長している。

りんごは、外観よりも食味を最も重要視し、無袋栽培、化学肥料(窒素)および着果数の制限による健全な樹体管理に努め、特別栽培にも取り組んでいる。黄色系のはるか、県オリジナル「紅いわて」など優良品種も積極的に導入している。

直子氏は、果樹園で地産地消カフェを開業し、農作物の付加価値化や規格外果実の活用など 6 次産業化を推進し、現在は所得の約 4 割を加工直売飲食が占め、農業経営の安定化が図られている。女性起業家としても注目を集め、各種の研修会の講師等を務めている。

後継者育成、食育、地域活性化の面でも、県農大生の研修受入の他、地域の若手果樹農業者や非農家の地域住民、地元企業等の協力による「りんご畑 de コンサート」を開催し、チャリティー募金を県に寄付するなど積極的に地域貢献をしている。

### 農林水産省生産局長賞

- 福島県 <sup>ふくしまし</sup>福島市 (もも、なし)  
<sup>ししど</sup>宍戸 <sup>かおる</sup>薫 ・ <sup>ししど</sup>宍戸 <sup>ようこ</sup>洋子

なし100a、もも90aの大規模果樹専作経営であり、夫婦2人の労働力を中心に営まれている。

もも、なしの多品種を計画的に組み合わせ、摘果・収穫等作業時期の分散、自然災害の危険回避、市場価格変動への対応等により経営安定が図られている。(もも；あかつき、まどか、川中島白桃を主体に補完8品種をあわせた11品種、なし；幸水、豊水、二十世紀を主体にあきづき、新興、王秋を組合わせた6品種)

ももでは、低樹高栽培(大藤流整枝剪定技術)による早期多収栽培、なしでは樹体ジョイント仕立て方式による省力・早期成園化に取り組むほか、高品質・大玉生産のための完熟たい肥を施用した地力向上や交信攪乱剤を利用した減農薬栽培にも取り組み、地域のモデル農園となっている。

指導農業士として地域の相談役となるほか、農業委員として「遊休農地対策協議会」を立ち上げて地区内の遊休農地解消に積極的に取り組んでいる。

### 農林水産省生産局長賞

- 茨城県 <sup>ひたちおおたし</sup>常陸太田市 (ぶどう)  
<sup>ほんだ</sup>本多 <sup>ぎけん</sup>技研 ・ <sup>ほんだ</sup>本多 <sup>まゆみ</sup>真弓

ぶどう190a、水稻35a、合計225aの果樹を中心とする大規模経営であるが、夫婦、長男、次男の家族4人の労働力を中心に、繁忙期には臨時雇用を活用して、効率良く栽培管理をしている。

全面積を無加温ハウス及び雨除け施設とし、気象の影響を受けにくい安定した経営を実現している。また、環境に配慮し農薬散布回数を減らした高品質果実の生産が可能になっている。

顧客との直接対面販売のため、約30の特徴ある品種を栽培するほか、直売所のオリジナル看板や蔵を活用した休憩所、遊休ぶどう棚での藤栽培など随所に工夫がみられる。

JA常陸常陸太田ぶどう部会のオリジナル品種「常陸青龍」は、技研氏の祖父が育成し、技研氏本人が品種登録を行った。ロゴやパッケージ等の統一デザインを作成し、産地ぐるみのブランド化が図られている。

後継者の兄弟は、生産者と料理人・パティシエが連携し地産地消をすすめる「ぶどうフェス」等地域活動にも積極的に参加している。妻の真弓氏は、茨城県女性農業士として県立農大生の研修受入、地元小学生を対象としたぶどう作り体験等若い農業者の育成や食育活動に大きく貢献している。

## 農林水産省生産局長賞

- 山梨県 <sup>ふえふきし</sup> 笛吹市 (ぶどう)  
<sup>ふえふきのうぎょうきょうどうくみあいやつしろししよ</sup> 笛吹農業協同組合八代支所ブドウ部会 (代表者 <sup>ないとう たけひろ</sup> 内藤 武寛)

ぶどう 80ha を栽培する 150 戸の JA 部会である。平成 26 年産の共同出荷量は 727 トン、出荷額は約 6 億円である。

食味を重視した「八代ブランド」として消費者・市場から信頼を獲得しており、日本一の高値を目指す販売戦略（厳選品の認証）とともに、市場からの注文に応じた「つぶつぶパック」の限定販売等、流通・販売チャンネルの多様化や香港を中心とした中華圏への輸出促進に積極的な取り組みを行っている。

さらに、ロザリオビアンコの栽培技術や販売体制を確立し、国内でもトップクラスの地位を築いている。このロザリオビアンコで確立された整枝剪定方法をシャインマスカットに応用し、省力化と均質化を実現している。出荷者全員がエコファーマー認定を受けるほか、「通いコンテナ」出荷により出荷資材の節減にも取り組むなど、環境にやさしい農業生産を進めている。

一方、新規就農者等に対して技術・経営管理の研修を篤農家グループが実施し担い手を積極的に育成しており、次代を担う若手農家が「青年部」として各種研修会や講習会を積極的に実施している。

## 農林水産省生産局長賞

- 愛知県 <sup>たはらし</sup> 田原市 (うんしゅうみかん)  
<sup>あいち のうぎょうきょうどうくみあい いらご</sup> 愛知みなみ農業協同組合 伊良湖ハウスミカン部会 (代表者 <sup>さいとう やすひろ</sup> 斉藤 康宏)

ハウスみかんを 3.6ha 栽培する構成員 6 戸の生産出荷組織である。部会員全戸に 20～40 代の後継者が確保され、彼らが組織運営を行っている。

部会では、小さな組織としての長所を最大限に活かし、部会員全員が品質・出荷量・時期について確固とした目標を共有し、実需者のニーズに応じたハウスみかんの出荷を実践している。

均一な土壌条件を有す半径 400m 内に栽培施設が集約されていることで栽培管理が平準化されていることに加え、親世代から続く毎月のほ場巡回及び果実調査の実施により果実品質を揃え、ニーズの高い 7 月末～8 月上旬の需要期に全出荷量の 4 割を集中出荷している。

部会独自の取組として、栽培管理の指標に果実調査結果を元に作成した果実生育モデルを活用し、過度な水分ストレスによる樹への負担を軽減し、毎年安定した品質と高単収の両立が図られている。

部会の平均単収は 6.5 t/10a と、愛知県の平均単収 4.7 t/10a を大きく上回り、1 戸あたりの平均販売額はハウスみかん部門だけで 3,300 万円以上を確保している。



## 全国農業協同組合中央会会長賞

- 北海道 <sup>ましげんましげちよう</sup> 増毛郡増毛町 (りんご、おうとう)  
<sup>やまぐち としゆき やまぐち かよこ</sup>  
山口 利幸・山口 加代子

りんご250a、おうとう120a、西洋なし70a、ぶどう(生食)40a、その他70aの合計550aの大規模果樹専作経営であり、夫婦、後継者夫婦、両親の家族6人の労働力を中心に、常時雇用6人、臨時雇用により営まれている。おうとうは、雨よけ栽培を全面積に導入することにより農業所得の6割を占める経営の柱となっている。

経営の特色は、対面販売主体で、最も面積が大きいりんごは、消費者の多様な要望に応えながら多品種化を進め、作業分散と長期販売が可能となったほか、加代子氏を中心に加工販売(ジャム、乾燥りんご等)の取組を進めている。

技術面では、クリーン農業(交信かく乱剤利用や普通物薬剤のみによる防除等)に率先して取り組み、地域全体の農薬使用低減に貢献している。おうとうでは、ミツバチを補完するマメコバチを利用した着果安定や、剪定、摘蕾の徹底などにより大玉・高品質生産を実践している。りんごでは、多雪・石礫土の地域にありながらも矮化栽培を積極的に取り入れるとともに、作業性と省力化を目指した疎植・低樹高栽培を行い、高い製品化率を維持している。

利幸氏は、青年部活動のリーダーとして活躍した経験や平成26年度に認定を受けた北海道指導農業士としての知見を活かし、地域の若者への技術・経営面での指導・助言のほか、大学・専門学校生の研修や町内の児童や生徒を受け入れて食育にも取り組むなど、農業・地域の担い手育成にも大きく貢献している。

## 全国農業協同組合中央会会長賞

- 福島県 <sup>だてし</sup> 伊達市 (かき(あんぽ柿)、もも)  
<sup>ししど さとし ししど はつこ</sup>  
宍戸 里司・宍戸 初子

かき(あんぽ柿)56a、もも41aの果樹を主体に水稻48a、野菜(いちご等)61aの複合経営であり、主に夫婦2人の労働力により営まれている。

あんぽ柿生産において、従来からの「平核無」から加工適正に優れる「蜂谷柿」への転換を進め、生産・収入を安定化している。かき、ももの果樹経営に「いちご」を加えて労働力分散と経営の安定化が図られている。

あんぽ柿の加工特性に優れた「蜂谷柿」に注目し、蜂谷の隔年結果性解消による安定生産のための「五十沢柿研究会」を発足させ自らも会長として活動し、地域への普及に貢献した。あんぽ柿加工の生産性向上のために、真空吸引皮むき機、火力乾燥機を先駆的に導入し、これらの技術も地域に普及拡大されている。

東日本大震災の影響によるあんぽ柿の加工自粛に際して、JA伊達みらいあんぽ柿生産部会長として、生産再開に向けた各種取組を推進する上での農家や関係機関との意見調整等に尽力し、震災からわずか3年の短期間での加工再開の実現に大きく貢献している。

## 全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

- 福井県 <sup>みかたかみなかぐんわかさちょう</sup>三方上中郡若狭町 (うめ)  
<sup>ふかがわ</sup>深川 <sup>のぶえ</sup>延衛 ・ <sup>ふかがわ</sup>深川 <sup>せつこ</sup>節子

うめ180aの大規模果樹専作経営であり、夫婦、長男夫婦の家族4人の労働力を中心に営まれている。

地域では稲作+うめ経営が多いなかで、いち早く(昭和46年~)うめ専作に経営転換した。さらに、青梅生産主体から青梅+白干梅加工に取り組み、傾斜園地でのネット収穫と一次加工のための乾燥用ハウス・加工施設を整備することで安定収入を確保している。うめの経営改善に不可欠な単収アップのため、主力品種の「紅サシ」から加工専用品種の「新平大夫」、「福大夫」を平坦な水田に導入し、単収向上、軽労化ならびに白干梅の高品質化の実証に取り組んだ。新たに導入した品種は樹勢が強いため春の新梢管理、夏季剪定等で受光体勢の良い樹を継続的に維持する技術を確立し、豊凶差が少ない高単収を実現。完熟落果果実のネット収穫により青梅収量の1.3倍の収量を確保している。

延衛氏の新品種導入への取組により、福井梅=「紅サシ」・「剣先」の概念に変化がみられ、JA共撰での「福大夫」の取扱いがスタートしたほか、「青梅産地」から「青梅+白干梅産地」への変革を牽引するなど、地域農業への貢献は大きい。

## 全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

- 長野県 <sup>さくし</sup>佐久市 (すもも(プルーン))  
<sup>さくあさまかじゅせんもんいんかい</sup>JA佐久浅間果樹専門委員会 <sup>せんもんぶ</sup>プルーン専門部 (代表者 <sup>こやま しげた</sup>小山 茂太)

すもも(プルーン)44haを栽培する378戸のJA部会である。平成26年産の共同出荷量は308トン、出荷金額約1.4億円である。

部会のすべての生産者に対し統一の生産者カード「私が作りました」を投入することを義務付け、主力のサンプルーンでは食味を重視した高品質果実の供給のために出荷解禁日を設定して「佐久浅間のプルーン」ブランドを構築している。

通常プルーンの栽培は露地栽培が主であるが、当部会では、秋雨による裂果等の品質低下を防ぐため、8月の盆以降に「雨除け」を設置して高品質プルーンを生産・出荷している。

プルーンの生食についての認知度が低いことから、県外量販店での試食宣伝会に生産者自らが出向き、生食の普及にも積極的に取り組んでいる。

### 日本園芸農業協同組合連合会会長賞

- 山梨県 <sup>こうしゅうし</sup> 甲州市 (もも)  
    <sup>きたい こうじ</sup> 北井 功司 ・ <sup>きたい さちこ</sup> 北井 幸子

もも（施設15a、露地65a）、花卉25a、合計105aの果樹を主体とした複合経営である。

経営面では、施設栽培と露地栽培を巧妙に組み合わせることで、5月下旬から9月下旬までの長期に亘り、切れ目のないリレー出荷を可能にしている。また労働力管理やコスト管理の徹底、栽培管理の工夫などにより、雇用労働力を一切使わずに夫婦2人の労働力による管理を実現している。

技術面では、究極の作業効率を追求した新たな仕立て方法や摘蕾の段階で本摘果と同じ感覚で作業を行い、養分の浪費を最小限に抑える「超早期摘蕾栽培法」を確立した。この栽培法によって作業効率と果実品質が最大化され、地域の平均より1割程度大きい16玉以上の大玉果安定生産を実現している。また、苗木の品質を高位平準化するため、優良系統選抜にも強くこだわる。そのため系統の探索には情報収集を徹底して行い、3年程度は自ら栽培して絞り込んだ後、苗木養成圃場でも更に選抜して定植する系統を決定している。

功司氏は甲州市の農業委員のほか、全農山梨及びJA フルーツ山梨のハウスモモ部長を歴任し、地域のモモ栽培はもとより山梨県下の果樹農業振興に貢献するほか、地域の若手生産者グループを積極的に育成している。

### 日本園芸農業協同組合連合会会長賞

- 静岡県 <sup>しずおかし</sup> 静岡市 (かんきつ)  
    <sup>あさくら かつとし</sup> 朝倉 克年 ・ <sup>あさくら けいこ</sup> 朝倉 圭子

青島温州150a、はるみ・不知火50a、すもも20aの合計220aの大規模果樹専作経営であり、夫婦、長男の家族3人の労働力を中心に営まれている。

急傾斜園地が多い中で、平成4年以降に県営畑総による大規模基盤整備を契機として高齢リタイヤ農家の農地を借地して規模拡大を進め、平坦園地でのSSを導入した効率的な経営を目指す「しみず型農業」の牽引役となっている。温州みかんと繁忙期が重ならない“すもも”を導入し初夏の収入確保により経営の安定化を図っている。

在来温州から青島温州への改植、さらに新品種“峰太”への計画的改植を進めており、全園地をマルチ資材被覆栽培とし高品質化に取り組み、糖度は共選場出荷平均より1度高く、秀品率は7ポイント高い。点滴かん水施設を導入しマルチ資材被覆後の過乾燥や収穫後の液肥混用かん水による樹勢回復により、高品質連年安定生産にも取り組んでいる。

みかんオーナー制度(20kg1口、農作業体験)を行い消費者とのコミュニケーション、信頼構築に努める。克年氏は地元JA柑橘委員会委員長をはじめ地域の要職を歴任し地域農業を先導し、圭子氏もJA支部女性部長を歴任し地域農業に貢献している。

### 全国果樹研究連合会会長賞

- 香川県 <sup>たかまつし</sup>高松市 (ぶどう、うんしゅうみかん、びわ)  
<sup>こうの</sup>河野 <sup>のぶひろ</sup>統博 ・ <sup>こうの</sup>河野 <sup>よしえ</sup>良江

ぶどう35a、うんしゅうみかん100aを主とする合計150aの大規模果樹専作経営であり、夫婦、長男の家族3人の労働力を中心に営まれている。

ぶどうと貯蔵みかんを柱に早生温州やびわを組み合わせた多品目経営であるが、作業ピークを分散させた家族労働力主体の効率的な経営が実現されている。

全国に先駆けて産地試験栽培が行われたシャインマスカットを導入し、困難といわれる加温栽培を行うことにより出荷を前進化し、市場での評価は産地内でトップクラスとなっている。貯蔵みかんの主力品種である青島温州の特性を活用した樹別交互結実法により安定した高品質中玉果の生産を実現している。JA 扱いの個選個販体制のブランド「蔵出し本貯蔵みかん」の中でも、「川信 (かわのぶ)」の屋号で荷造りされたみかんは高い市場評価を得ている。

ぶどう、うんしゅうみかんの新品種の導入、「蔵出し本貯蔵みかん」など産地での新しい取組をいち早く導入するなど地域の牽引役として大きく貢献している。

### 公益財団法人 中央果実協会理事長賞

- 大分県 <sup>うすきし</sup>臼杵市 (かぼす)  
<sup>ふじわら</sup>藤原 <sup>てるゆき</sup>輝幸 ・ <sup>ふじわら</sup>藤原 <sup>ゆみ</sup>由美

かぼす110aを経営の柱とするたまねぎ、しいたけとの複合経営であり、労働面は、夫婦2人の家族労働力を中心に臨時雇用により営まれている。

かぼすのハウス栽培は重油高騰の影響から産地では減少傾向にあるが、ヒートポンプを導入することで燃料使用量を半減させ、施設栽培(加温、無加温)を導入することで出荷時期や労力配分も分散させることにより、高単価で安定したハウス栽培を拡大している。

露地の園地は軽トラが入れるよう園内道路を設け管理作業が効率化。カボスの特選園運動には開始当初から積極的に取り組んでおり、こまめな園地観察による適期作業とあいまって青果率は毎年8割前後と極めて高くなっている。また、加工原料用であっても青果での出荷を基本とした早期収穫により、樹体への着果負担が軽減されて隔年結果も防止されている。

営農指導員の経験もあって栽培技術が非常に高く、地域の生産者への指導等栽培技術向上に大きく貢献しており、「目黒のサンマ祭り」をはじめとする消費宣伝にも積極的に関わっている。